

海野一隆著

## 『地図文化史上の広輿図』

(東洋文庫論叢第七十三)

谷口 規矩雄

今回図らずも私が故海野一隆教授の表記の大著を紹介批評することになった。冒頭から私事になって誠に恐縮であるが、この事についてお断りをさせていただきたい。私は大阪大学に奉職していた間、ほぼ九年同僚の末席に加えていただいたのであったが、その間に海野先生の碩学の一端に触れることはあったものの、なお十分な認識は持っていなかった。

先生は大学を退官される直前に著書『ちずのしわ』(雄松堂、一九八五年刊)を我々同僚に贈って下さった。この内容の博大にして精緻なることに私は驚嘆した。海野先生に対する私の認識は誠にこの程度の物なのである。その私が先生の業績の重要な一角を占めるこの大著を紹介するのは全く不適任なのであるが、上記のような縁で敢てお引き受けした次第である。それに猶この著書の編者である栗木佳美氏は大阪大学大学院で東洋史を専攻され、私の受講生でもあったと云うことが重なっている。地図学史に全く門外漢の私の紹介として至らない所は大方の御諒恕を得たいと思ふ。

さて、本書の内容であるが、先ず目次を掲げる。

はしがき

凡例

序章

第一節 方格地図の伝統

第二節 『広輿図』とは

第一章 『広輿図』の成立と諸版本

第一節 稿本と初版本

第二節 増補本

第二章 朱思本の「輿地図」との関係

第一節 方格への信頼

第二節 朱思本図の内容

第三章 地図帳としての『広輿図』

第一節 地図と記事

第二節 主題図の採用

第三節 辺境・外夷への関心

第四章 国内における反響

第一節 『広輿図』を模倣した地図帳

第二節 書籍所載の『広輿図』系地図

第三節 一面図への回帰

第五章 ヨーロッパにおける反響

附録一

自序草稿

附録二

一、羅洪先伝記

## 二、『広輿図』研究文献目録

## 三、『広輿図』の版本について

解説

あとがき

以下目次の順に従って内容の紹介を進めたい。はしがきでは、本書が海野一隆教授の遺稿をまとめたものであることや、出版に至るまでの経緯等が大阪大学文学研究科人文地理学教授小林茂氏により紹介されている。

序章、第一節冒頭で地図出現の意味を簡潔に説かれ、出土資料として甘肅省天水市放馬灘の秦代墓出土の地図や、馬王堆漢墓出土の地図が上げられている。これらの出土地図における特徴は河川流路の図形であり、当時の社会において地図作成の座標とされたのは河川流路であったことが指摘されている。ではその後の地図作成に当たっては如何なる点が注意されたのであろうか。そこで取り上げられるのが裴秀の『禹貢地域図』の序文である。そこには注意すべき点として六項目が上げられており、その第一が「分率」で、今日言うところの縮尺のことであり、図面上の縮小率が一定でなければならぬことを強調したものとされる。二は「進望」、物の遠近の関係を明確にすること。三は「道里」、測量コースの距離を計測すること等。今日の観点からしても肯けるものであろう。

それではこうした注意点を踏まえて裴秀が完成させた国土全図である『禹貢地域図』とは如何様な物であったのであろうか。氏は図が正方形であったと仮定し一辺八三九丈 $\equiv$ 二〇、二四メートル

ルに及ぶ巨大な絹布に描かれたものであった。ただ余りに大きく閲覧には不便であったので一辺一丈、縮尺一寸百里（一八〇万分の一）の図が同時に用意されていたと推定されている。縮尺「一寸百里」という表現は図面に一区画一寸の方格が記入されていたことを意味するから、原本の『禹貢地域図』にも方格があったに違いない。裴秀のこの地図の直系かどうかは分からないが宋代石刻の『禹跡図』に「每方折地百里」の方格が記入されていることから見ても方格の存在は確実であったとされている。いずれにせよ縮尺に基づく方格地図の出現は三世紀にまで遡ることが指摘されている。ところでこの方格と西洋製地図の方眼図法による経緯線網とは全く異質なものであることが強調されている。それは中国地図学では一貫して大地平板説を前提としているからであり、その故に本著では「方格地図」という呼称を用いるとされている。

裴秀によって採用された「一寸百里」という縮尺は、その後、唐の賈耽『海内華夷図』に引継がれたいが現存せず、その流れを汲む宋代石刻の『華夷図』等が存在するが方格の記入は無かった。宋代の国土全図のうち、方格を備えているのは上述の『華夷図』（陝西省博物館蔵）の背面に彫られている『禹跡図』、及び同種の『禹迹図』（鎮江博物館蔵）の二点であり、共に「每方折地百里」という注記がある。以上のことから、国土全図の場合、図上の方格の実地距離を「百里」に定めると言う方式は宋代頃までに不動のものとなった。それがやがて元代の朱思本の『輿地図』に引継がれ、更に明の羅洪先の『広輿図』に繋がったことが明らかにされている。

第二節では、羅洪先の『広輿図』が元の朱思本の地図を基礎に

した方格図法による地図であることを論じると同時に、それが一枚図ではなく地図帳になっており、しかも各種の統計や行政区画一覧表をも備えている点に羅洪先のこの地図作成の意図を探ることができるされている。この『広輿図』は需要が多く度々版を重ね、以後の中国のみならず東西両洋に伝播し大きな影響力を持った。そうした点から世界の地図史において『広輿図』の持った意義、役割を明らかにするのが本書の目的とされている。

本論に入つて第一章では表題通り『広輿図』の成立と諸版本について詳細な考察がなされる。第一節では初版本と考えられる羅振玉氏旧蔵の『広輿図』序文の考察から始められ、羅洪先の文集等関係資料を検討された結果、初版の刊行には、当時江西省の地方官であった王宗沐の尽力が大きく作用し、その刊行は嘉靖三十六年（一五五七）のことと推定された。またその稿本の作成には十余年の歳月が費やされ嘉靖三十三年（一五五七）に完成したとされている。

第二節、羅洪先の『広輿図』は彼の存命中に既に三回刊行されているだけでなく、その後も清の嘉慶版に至るまで数回にわたつて刊行、増補が行われた。氏は第二版と考えられる嘉靖三十七年刊本から嘉慶刊本に至るまで全ての刊本について、内外を問わず現存の諸本の内容を比較検討された。嘉靖四十年刊本では琉球・日本・四夷の三図が補入されたほか、各省及び九辺に関する記事が加えられたが、以後の版における方格の扱いを初め、記事の増補の相違までが詳細に比較検討されている。

第二章は朱思本の『輿地圖』との関係と題されている。羅洪先は三年の努力の末ようやく信頼に値する地図として朱思本図を発

見した。彼はこの図を基礎にして『広輿図』を作成したのであったが、その朱思本図は今日伝存していない。そこで氏は『広輿図』の内容を検討することにより、逆に朱思本図の内容を明らかにすることができると考えられた。朱思本図は縦横七尺の大幅の一枚図であったのを、羅洪先はそれを分割して各々独立した四十八地方図として一帳にまとめたのであったが、その主要部分をなす二直隸十三省の各図は全て毎方百里の方格で統一されている。従つて基礎となつた朱思本図にも整然とした方格（考察により縮率八分百里とされた）が描かれていた筈であると推測されている。

また中国本土以外で『広輿図』に収載されている朝鮮図・安南図・西域図・黄河図等外域図と朱思本図との関係が考察されており、その多くが朱思本図を分割改訂したものとされている。この中で特に注目されるのは黄河図第三で、これには元代、都実によつて行われた河源探検（至元十七・一七八〇）に基づく知見が早くも地図化されていることが指摘されている。更にこうした検討の結果、朱思本の作図法や図形には、当時中国に流入してきていたイスラム地図学の影響は全く認められず、中国の伝統的地図学に忠実に従つたもので、それは彼が当時の南方道教の高位の道士であったことも関係しているかもしれないという興味ある推察がなされている。

第三章は、『広輿図』が単なる地図帳であるだけでなく、かなり多くの記事を載せている。そこで氏は朱思本図以外に、羅洪先が参考にしたであろう資料の考察をされる。最初に取り上げられたのが桂萼の『皇明輿図』である。これには図紀と題された部分があり、それには府州県・軍衛・戸口・錢糧・軍馬に関する統計

等が記されている。これらの統計項目と数値を『広輿図』のそれと比較すると、その殆んどが一致する。こうしたことから図帳としての『広輿図』は『皇明輿図』を基本にしたものと判定されている。またこれとは別に『広輿図』には黄河図・海運図・漕運図等、主題図というべき地図が採用されているが、殊に特徴的なのは九辺鎮等の辺境地図である。氏はこれら辺境図の基となった資料を詳細に考察すると共に、当時の明朝の直面した「北虜南倭」という政治問題に羅洪先が強い関心を持っていた現れであると述べていられる。また「東南海夷図」、「西南海夷図」は元の李泽民図を借用したものであるが、日本図に関しては元代に行われていた物より退化していると指摘しておられる。

第四章では、『広輿図』が伝統的な方格図法に基づいた精細な地図帳であったところから、中国において、それ以後の地図帳の作成に絶大な影響を与えたが、その具体的な様相を徹底して詳細に考察されている。最初に『広輿図』にわずかな増補改訂を行っただけの地図帳として汪鏞預の『広輿考』（万曆二十三・一五九五年刊）が取り上げられ、次いで陳組綬『皇明職方地圖』（崇禎九・一六三六年刊）、顧祖禹『輿圖要覽』（順治十二・一六五五年序）について、それらの地図や記述の相違点等が具体的に考察されている。更に嘉靖三十六年の序をもつ張天復『皇輿考』から始まり、清の嚴如煜『洋防輯要』（道光十八・一八三八年刊）に至るまでの各種書籍三十五点について『広輿図』系の地図がどのように取り入れられているかを検討され、十六世紀半ばから十九世紀後半に至るまで三世紀余にわたって『広輿図』の地図は書籍の中で生き続けたことを明らかにされた。しかし清代中期以降は、

この地図も耶蘇会士の指導によって完成した康熙図にとつて代わられていったのであった。ところが第三節では、こうした地図が一方では一面図へ復帰して行く動きがあったことが論じられる。一面図には国土全体を一時に複数人が一覽できる長所があるからである。その最初と考えられるのは、『広輿図』を基にした白君可の中国全図（朝鮮模写本、万曆二十二年）であり、次いで『備誌皇明一統形勢分野人物出処全覽』（於福州、万曆三十三年・一六〇五年刊）、『皇輿図』（刊行年不明）が上げられる。これらの後の出版で注目されるのが清初の思想家黄宗羲の作品と判定された国土全図（康熙十二・一六七三年刊）である。氏はこの地図が『広輿図』系のものであることを明らかにすると共に、この図の内容が清代の現勢を示していることもあつて歓迎を受け、多数の改訂版が出現したことを述べている（これらについては一覽表が付されている）。これらの中で乾隆三十二年（一七六七）刊の黄千人『大清万年一統天下全図』ではイギリス・フランス等西洋諸国名が追加され、マライ半島が描かれるなど、それまでの中国国土全図の域を脱した伝統的な華夷風世界図へと変化してきていることが指摘されている。

第五章はその表題通りヨーロッパにおける『広輿図』の影響が考察される。一、西洋最初の単独シナ図はオルテリウスの地図帳『世界の舞台』（一五八四年版）所収のものであるが、これがポルトガル人バルブダの作品であることはほぼ間違いないとされる。そこでバルブダが依拠した資料として、バロスの『アジア旬年史』や、当時既にスペインに到来していたと考えられる『古今形勝之図』等が検討されるが、それらはいずれも利用された可能性

が低いとされ、従って『広輿図』系の地図が参照された形跡は無いと判断された。二、それではいつ頃どのような形で『広輿図』はヨーロッパへもたらされたのであろうか。最初期のものと認められるのはスペイン人宣教師として一五七五年中国を訪れたラーダの手記である。この手記に記載されている省別の都市の数、戸数、納税者数等が『広輿図』に基づいており、また辺境の行政区の名称等については『皇明輿地之図』が参照された可能性が高く、この手記はやがてメンドーサの『シナ大王国誌』の内容にも取り入れられたので、『広輿図』のヨーロッパへの影響は、ラーダの手記、ないしはメンドーサの著書をもって嚆矢とすることができるとされている。次いで十七世紀、フランス王室地理学者であったニコラス・サンソンの証言を検討し、彼が一六五六年刊行したシナ図は『広輿図』の図形的特徴がよく現れたものであることや、ルジェリ作のシナ図との関係等が紹介されている。

三では、イギリスへのシナ図の到来の状況が考察される。世界で三人目の地球一周航海家であったトーマス・キャンペンディシュが一五八八年、航海を終えて持ち帰ったシナ図がイギリス到来の最初のものと考えられるが、『広輿図』系のものかどうか判定できないとされている。当時イギリスでは世界進出競争に乗り出し東洋に関する情報収集に努力していた。そうした中、徳川家康にも会見したことのあるジョン・セーリス船長がバンナム（ジャワ島）で入手したシナ図を持ち帰った。この地図は簡略化してパーチャスの『ハクルートの遺著』に収載されているが、パーチャスの記述によれば、セーリスのもたらしたシナ図は内容の詳しい大型図で、漢字で『皇明一統方輿備覽』と題され、『広輿図』を資

料として作成されたことが明らかにされている。ではパーチャス自身の地図はどのようなものであろうか。それに記された地名などはマテオ・リッチの回想録など当時のイエズス会士の報告をよく検討、利用していて優れたものになっていることを紹介されている。

四では、十七世紀後半になって、中国から一時帰欧したイエズス会士自らが詳細なシナ地図帳を編集することが始まった。その最初としてポイムのシナ図帳が取り上げられる。氏はこの図の基礎になった資料を詳しく考察され、満洲・朝鮮の地名はマテオ・リッチの『坤輿万国全図』に従っていることなど、系統的には『広輿図』系の図集に拠ったものではないと判断された。このポイムのシナ図は地名表記に漢・欧の両文字を用いた西洋最初の本格的な作品と評価されるが、漢字が印刷の障害となり結局出版されなかった。ところがほぼ同時期、欧字のみのシナ地図帳として出版されたのがマルチーニの図帳であった。これがブラウの『世界地図帳』の第六巻として刊行（一六五五年）され、その後多くのヨーロッパ語に翻訳されて広まった経緯。またこの図帳の内容が多く『広輿図』の記事によっていることなどを明らかにされている。最後の「要約と結語」では、シナ地図学西漸史年表が掲げられると共に、『広輿図』が西洋地図学史に与えた影響として、第一にシナ国土に関する詳細正確な情報を提供したこと。第二として地図学的方法論的な面において、西洋に新風を送り込んだこと、即ち地図上に砂漠を描示するという技法を伝えたことを上げておられる。なおこの後に全体の補遺、追記がなされている。

最後に附録一、附録二、解説が置かれている。附録一は海野教

授自身の「自序草稿」である。附録二は、本書の編者である要木佳美氏の手になる羅洪先の伝記と年表であるが、筆者は文中において羅洪先が重要な陽明学の思想家であることには殆ど触れなかった。彼のそうした立場や師友関係を知る上で、氏の文は大いに役立つと思う。また『広輿図』研究文献目録、『広輿図』の版本についても研究者にとって有用な記事であろう。久武哲也教授による「解説」は海野教授の『広輿図』研究に対する誠に的確な解説であり必読である。

以上、本文五章および附録について筆者の紹介なり感想を述べさせていただいた。本書を読んで痛感したことは海野一隆教授の学殖の該博なことはもとよりであるが、資料検討の厳密さと同時に、現存の資料については個人の力の及ぶ限り、国内はもとより、

外国にまで足を運ばれそれを実検しようとした態度には、ただただ頭の下がる思いである。随所に掲載されている地図写真がその一端を物語り、読者の理解を助けるであろう。本書は地図学史研究に大きな基礎となるべき著作であるに違いない。なお最後に上がったが、この重要な著作の原稿を預かり、大部の一冊にまとめ上げられた要木佳美氏の編集努力については高く評価されるべきものと思う。また本書の出版に尽力された斯波義信名誉教授と東洋文庫の関係者の方々にも感謝の意を表したい。

(B5版 四〇〇頁 二〇一〇年三月 東洋文庫)

税込七三五〇円)

(大阪大学名誉教授)